

特別展

アメリカの水彩画

ホイットスラーからワイエスまで

会期：10月18日(火)～11月27日(日)

会場：地下1階主陳列室

主催：渋谷区立松濤美術館、日本経済新聞社

トマス・モラン キヤッスルピュット
グリーンリヴァー ワイオミング(1900年)

渋谷区立松濤美術館

アメリカの水彩画

〔水彩画とその歴史〕

画材の中で、油絵以外の、絵具を水で溶く素材は広い意味で水彩と呼ばれますが、通常的水彩画には、薄塗りに適した透明水彩と厚塗りの可能なグワッシュと呼ばれる不透明水彩の二種類があり、本展出品作にも両者を併用したのがあります。

水彩画の歴史は非常に古いものですが、水彩画興隆の第一期は、18世紀から19世紀前半にかけてイギリスの地で訪れました。コンスタブル、ターナーなど多くの巨匠が現われ一般の人々にも普及し始めました。

このようなイギリスの水彩画の伝統を受けて新大陸アメリカでも水彩画を描く人々が現われました。

〔アメリカの初期水彩画〕

水彩画興隆の第二期は19世紀から20世紀にかけてアメリカで起ったと言われています。

開拓時代の初期、アメリカ東部に植民した人々の間から、大自然に向かいあって、身近な自然を描き、アメリカ的主題と美を表現した画家が現われ始めました。ハドソン川の景色を中心に描いたハドソン・リヴァー派の画家達はその代表例といえるでしょう。本展出品の画家W・G・ウォール、サミュエル・コルマンなどもその流れをくみます。

やがて国境が西へ拡大するにつれて、軍隊や調査隊に随行した探険画家とでもいべき人々が、インディアンの風俗や中西部の大自然をスケッチして貴重な記録を残しました。彼らの中から、G・カトリン、トマス・モランなどといった鑑賞に耐えうる芸術的な水彩画を生み出した画家が現われるようになりました。

〔水彩画の普及と拡大〕

1866年ニューヨークでアメリカ水彩画家協会が結成されて、水彩画の展覧会が多数開催されるようになりました。その上、19世紀前半から相次いで絵具の改良が行われ、チューブも発明されて、専門家だけでなく、一般大衆にも水彩画愛好の波が広がり始めました。



川向こうの町を望む ウィリアム・ガイ・ウォール 1825年作



ヨセミテ峡谷、カリフォルニア サミュエル・コルマン 1888年作



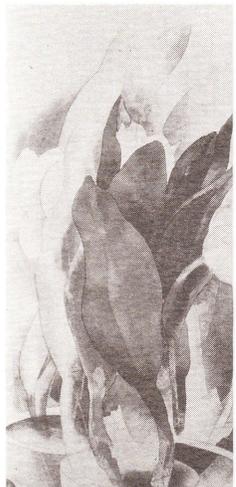
オパールの調べ、ディエップの砂浜 J・A・M・ホイッスラー 1886年作



海辺の娘たち ウィンスロー・ホーマー 1883年作



ヴェニス運河 ジョン・シンガー・サージェント 1880年頃



鉢植えのチューリップ ジョ

〔アメリカン・メディウム〕

水彩画協会に加わった画家の中で、J・C・サージェント、ウィンスロー・ホーマーの二人は、水彩画の名手として殊に有名です。サージェントはヨーロッパ仕込みの高度な技法で肖像画を描きました。水彩画にも手を染めるようになり、流麗で卓越した作品を多く残しています。W・ホーマーはイギリスの一漁村で、海で働く人々を題材に新境地を切り開き、アメリカ最大の水彩画家ともいわれています。彼の出現以後、批評家によって、水彩画は「アメリカン・メディウム」であるとまで言われるようになりました。水彩画はアメリカ人に最も適したアメリカ的な表現手段であり芸術となったと言っても過言ではないでしょう。

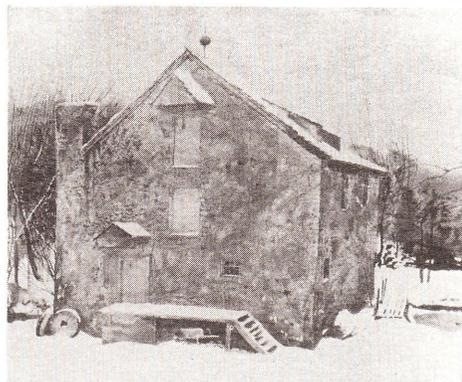
〔20世紀のアメリカ水彩画〕

19世紀後半から20世紀にかけて、多くの画家達がヨーロッパで学び、印象派、ラファエロ前派、そして立体派や野獣派などといった新しい様式や見方を合衆国に伝え、それらを吸収して独自の画風、様式を創り上げてゆきました。またアメリカの地方に根ざした芸術を標榜する「地方主義」や都市の貧民を描いた反アカデミズムの「ジ・エイト」などの画家達による運動も興り、アメリカ近代絵画を豊かでダイナミックな内容にしてゆきました。

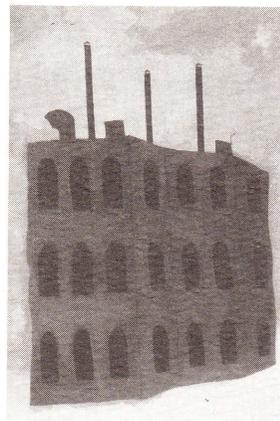
戦後は抽象表現主義、ポップ・アートの画家達など前衛芸術家によって水彩画は使用され、多彩な作品を生み続けています。

〔トランスコ・コレクション〕

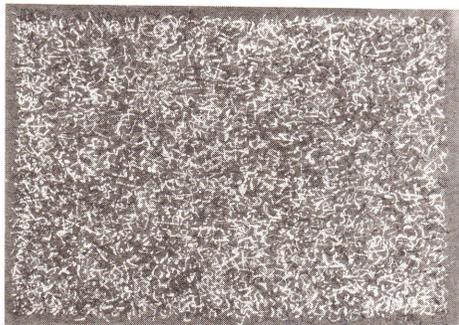
テキサス州ヒューストン所在の石油会社トランスコ・エナジー社は、美しい水彩画を所蔵していることで知られています。本展は同コレクションから、19世紀から20世紀までのアメリカを代表する60作家66点による水彩画を選び陳列するので、日本初公開です。



チャズ・フォードの石小屋
アンドリュー・ワイエス 1975年作



煙突のあるレンガの工場
ベン・シャーン 1950年頃作



白の描線 マーク・トビー 1959年作



チャールズ・デミューズ
1917年作



ヴァーモントの砂糖小屋 エドワード・ホッパー
1938年作



海辺の二人 ミルトン・エイヴァリー 1940年頃作

〔その他の主要出品作家〕

デイヴィッド・C・ジョンストン (1798~1865)

「主婦の苦勞」

ジョージ・カトリン (1808~1875)

「南米のフラミンゴの群れを待ち伏せる」

モーリス・プレンダーガスト (1829~1924)

「古いモザイクのポーチ、サン・マルコ寺院」

トマス・アンシュッツ (1851~1912)

「サマーハウス」

エドウィン・オースティン・アビー (1852~1911)

「森でもの思いに耽ける若い女性」

ジョセフ・ペナル (1860~1926)

「英雄たちの帰環」

ジョン・マリン (1870~1953)

「ランスコの古い教会、ニューメキシコ」

トマス・ハート・ベントン (1889~1975)

「溶鉱炉、西ペンシルヴェニア」

チャールズ・バーチフィールド (1893~1967)

「樹々」

ノーマン・ロックウェル (1894~1978)

「ワシに金彩を施す」

☆講演会

☆10月22日(土) 午後2時~

「富永太郎の詩と絵画」大岡昇平氏(作家)

☆11月5日(土) 午後2時~

「アメリカの風土と文化 - 芸術を育んだ社会的背景 -」

猿谷 要氏 (東京女子大学 現代文化学部長)

☆美術映画会

☆10月23日(日)午後2時~ 「円空」「ツタンカーメンの秘宝」

☆11月23日(日)午後2時~ 「江戸二大悪所之美-浮世絵師・宮川長春」

「肉筆秘画の世界-隠された美の系譜」

☆美術相談

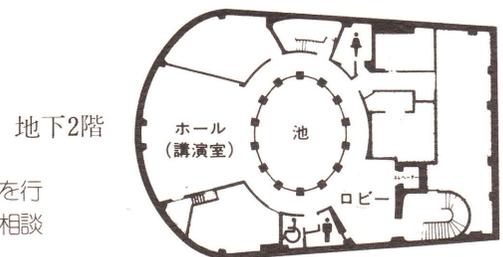
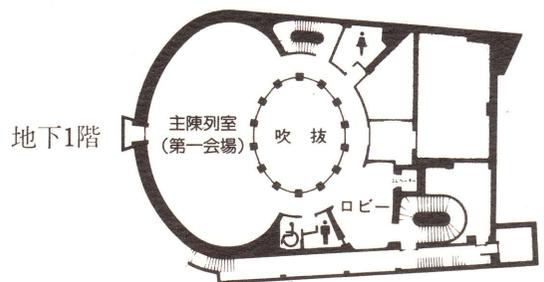
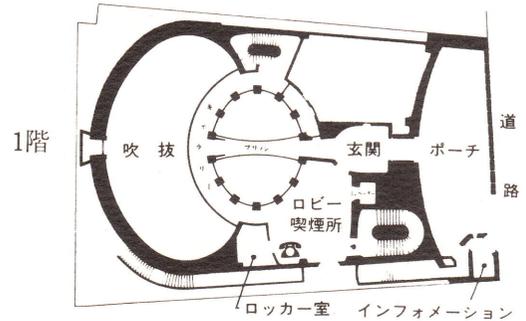
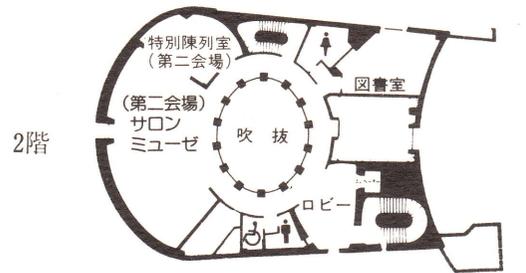
美術作家を招いて、実際に皆さんの作品を見ながら、指導、相談を行うほか、美術書、美術史などの相談に応じます。事前に電話等で相談内容をお申し込みください。

☆相談日・相談員

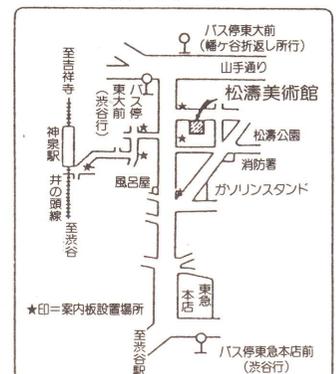
★10月30日(日) 午後1時~4時 磯村敏之(洋画) 畑農照雄(版画)

★11月20日(日) 午後1時~4時 西島俊親(洋画) 戸田康一(日本画)

松濤美術館・平面図



案内図



●会期 昭和63年10月18日(火)~11月27日(日)

●休館日 第2日曜日及び他の週の月曜日、祝日の翌日

10月/24日(月)・31日(月)

11月/4日(金)・7日(月)・13日(日)・21日(月)・24日(木)

●開館時間 午前9時~午後5時(ただし入館は4時30分まで)

●入館料

| | 個人 | 団体(20人以上) |
|------|------|-----------|
| 一般 | 200円 | 160円 |
| 小中学生 | 100円 | 80円 |